

## 方法的視座としての読書論——コメント——

宇野田 尚哉

すでに久しく近世思想史の研究から遠ざかってしまっている私には、もう一人のコメンテーターである小林准士氏のようにオリジナルな研究成果に基づいて発言する準備はない。そこで、以下では、本シンポジウムに関する研究史を整理し（第1節）、現在の研究水準においてとられうる視座の幅を確認したうえで（第2節）、それをふまえて各報告にごく簡単に言及することとしたい（第3節）。

### 1 研究史をめぐって

本シンポジウムの関心の中心にあるのは書物や読書の

問題であるが、『江戸の本屋さん』（日本放送出版協会、一九七七年）の著者今田洋三氏のような先駆的例外を別とするなら、書物や読書をめぐる現在の議論につながる新たな研究動向が起ってきたのは九〇年代に入ってからであったといえよう。この新たな研究動向は、最初は、アナル派第四世代の社会史家ロジェ・シャルチエの翻訳というかたちで顕在化してきた。シャルチエの最初の邦訳単行本『読書の文化史』（新曜社）が刊行されたのは、一九九二年のことである。その後、具体的な成果として研究史上の画期となったのは、一九九五年に発表された横田冬彦氏の論文「益軒本の読者」（横山俊夫編『貝原益軒』平凡社所収）であった。元禄・享保期の大坂近郊農村

上層の蔵書を具体的に明らかにし、その読者としての彼らの像をあざやかに示した同論文は、九〇年代に顕在化

してきた新たな研究動向の水準を定めるとともに以後の展開への道を開いた画期的業績であったといえる。当時

刊行されていた雑誌『江戸の思想』（ベリかん社）の特集号「読書の社会史」が刊行されたのが一九九六年、のちに『太平記読み』の時代』（平凡社、一九九九年）にま

められることになる若尾政希氏の研究が発表されつつあったのもこの頃であるから、書物や読書をめぐる議論は、九〇年代の後半以後に急速に盛んになったといえる。

近年では、宗教史研究の進展とも連動しながら、引野亨輔氏や澤博勝氏によって、オーラルなメディアの問題などを含みこんださらに立ち入った議論が展開されつつある。

書物や読書をめぐる九〇年代後半以後のこのような研究動向は、すでにさまざまな学会で取り上げられている。私が知る範囲に限っても、日本史研究会・歴史学研究会・歴史科学協議会・大阪歴史学会・関東近世史研究会

などでは、書物や読書の問題が、大会報告で取り上げられたり、学会誌で特集されたりしている。そういう意味

では、日本思想史学界／学会はこの新たな問題領域への反応が他と比べて鈍かったということを、自戒を込めて

確認しておく必要があるだろう。

## 2 方法的視座としての読書論

さて、ここまでは「書物や読書の問題」というようなかなり大雑把な言い方しかしてこなかったが、本来はもっと厳密な考察が必要であろうし、また、もっと厳密に考察したうえでしか読書論の問題構成と思想史研究はいかなる地点で有意義に結びつくことになるのかもはっきりしてこないであろう。そこで、本節では、その点についての整理をしておきたい。

私なりに簡潔にまとめるなら、最低限問われねばならない問題の系列は、(いつ・どこで・だれが・なにを・いかに読んだか、そしてその結果何が起こったか)ということになる。このうち、(いつ・どこで・だれが)という部分は、時期や地域や階層の問題を含みこんだ読者論の問題ということになるだろう。また、(なにを)という部分は、具体的にいえば、どのような内容のいかに作られた書物を、ということであるから、書物論の問題ということになるであろうし、この同じ問題を読み手の側からではなく作り手の側から捉えるなら、書肆論の問題ということにもなるであろう。さらに、その書物がそ

ここに届くまでの経緯に注目するならば、それは同時に、ネットワーク論の問題ということにもなるはずである。そして、「(いかに)」という部分——一人で黙読したのか、複数の聴衆の一人として講釈を聴いたのか、ゼミ形式で講読したのか、など——は、読書形態の問題ということになるであろう。

このように、ごくおおまかに整理しただけでも、漠然と言われる際の読書論の領域には、読者の地域性や階層性を問題にする読者論、書物の内容や作られ方を問題にする書物論、書物を作り手・売り手の観点から問題にする書肆論、書物を流布・流通の観点から問題にするネットワーク論、書物を享受のされ方の観点から問題にする読書形態論、などが含まれることが了解されるはずである。これらの領域を方法的に区別しそれぞれの領域での議論の精度を高めていくことが必要であることはあらためていうまでもない。

しかしながら、ここで私が強調したいのはむしろ、いま述べたような領域の研究は、歴史的な研究ではありえても、そのまま思想的な研究とはなりえないのではないかと、ということである。さきほどの私なりのまとめに立ち戻って言い換えるなら、「その結果何が起こったか」というところまで踏み込まなければ思想的な研究とは

いえないのではないかと、そこまで踏み込んで上記の諸領域とは水準を異にする狭義の読書論となりうるのではないかと、ということである。(いつ・どこで・だれが・なにを・いかに読んだか)の実証的解明じたいが必要であることはもちろんであるが、しかし、(その読書行為を通じて読書する主体はいかに再構成されたのか)、(そのような主体形成のマイクロなプロセスは近世的社会関係の再生産(もしくは再構成)というマクロなプロセスとどう関係していたのか)といった問題にまで踏み込むことが、議論が始まってすでに十年以上を経過した現在、とくに思想史研究には求められているのではないかと思われる。

### 3 各報告をめぐって

与えられた紙幅も尽きようとしているので、最後に各報告にごく簡単に言及しておくこととしたい。

まずは、高橋報告について。一八世紀後半から一九世紀前半にかけて信達地域に生きた内池永年の蔵書形成をめぐる高橋報告は、商人冲安海のような「媒介」者を重視するところに特色のある、たいへん興味深い内容の報告であった。ただし、「媒介」者の手を経てもたらされ

た書物は彼においていかに読まれその結果何が起こったのかについては、詳しい検討がなされないままであった。上述したように、思想史の研究としては今後この点に立ち入っていくことが必要なのではないか、というのが、私の考えである。次に福田報告についてであるが、受容者における意味の生成という問題を史料論的観点から明確に位置づけた同報告は、「思想を語るメディア」という全体テーマの内包している可能性を具体的に示したという点で、とくに重要な問題提起であったと思う。最後に、若尾報告については、やや個別的な問題になってしまいが、次の点に疑問を感じた。若尾氏が問題にする『理尽鈔』の政治思想は、あの膨大な『理尽鈔』のテクストから若尾氏が再構成したものであって、『理尽鈔』受容の現場に見出されたものではない。あの膨大な『理尽鈔』はどう語られ、どう受け止められたのか。若尾氏は、河内屋可正について、『理尽鈔』やその関連書を通して、「明君」正成像を受容していた（レジュメ四頁）と述べるが、可正が『理尽鈔』講釈を聴いていた（もしくは『理尽鈔』を読んでいた）ことを実証的に確認するのは、容易ではないだろう。「近世人の思想形成とメディア」というかたちで問題が設定されるのであればなおさら、『理尽鈔』受容の具体相が大きな問題となってくるので

はないかと私には感じられた。

## 注

- (1) 引野亨輔「真宗談義本の近世的展開」(吉川弘文館『日本歴史』第六三五号、二〇〇一年四月)、同「近世後期の神道講談と「真宗地帯」安芸」(瀬戸内海地域史研究会『瀬戸内海地域史研究』第九輯、二〇〇二年八月)、同「近世後期の神道講談と庶民教化」(日本宗教文化史学会『日本宗教文化史研究』第六巻第二号、二〇〇二年一月)、同「平田篤胤と「俗神道家」の間——神道講釈師玉田永教を事例として」(頼祺一先生退官記念論集刊行会編『近世近代の地域社会と文化』、清文堂、二〇〇四年三月)、澤博勝「近世社会における仏教的「教え」の受容と伝達」(仏教史学会『仏教史学研究』第四六巻第一号、二〇〇三年七月)など。

- (2) 各学会誌の以下の号参照。『日本史研究』第四三九号(一九九九年三月)、日本史研究会一九九八年度大会特集号、小林准士「近世における知の配分構造——元禄・享保期における書肆と儒者」を収める、『歴史学研究』第七六八号(二〇〇二年一〇月増刊、歴史学研究会二〇〇二年度大会特集号、若尾政希「近世の政治常識と諸主体の形成」などを収める)、同誌第七八一号(二〇〇三

年一〇月増刊、歴史学研究会二〇〇三年度大会特集号、小野将「近世の「国学」的言説とイデオロギー状況」、小林准士「知の国学的展開と近世後期の地域社会」を収める）、『歴史評論』第六〇五号（二〇〇〇年九月、歴史科学協議会編集、特集「書物と読書からみえる日本近世」）、『ヒストリア』第一五九号（一九九八年四月、大阪歴史学会一九九七年度大会個人報告として横田冬彦「近世村落社会における〈知〉の問題」を収める）、『関東近世史研究』第五一号（二〇〇二年一〇月、二〇〇一年度大会特集号、特集「江戸の出版物と文字文化」）。

（神戸大学助教授）